

観光舟運を利用した都市再生に関する考察

(株) エコー 正会員 ○江上 和也 日本大学 正会員 吉川 勝秀
 日本大学 学生会員 大関 祐次郎 日本大学 学生会員 五内川 謙

1. 背景

近年、都市の水辺環境への関心が高まっているが、国内において、水辺を積極的に活用した都市再生の事例は少ない。本研究では内陸舟運を水辺からの都市再生の一つの手段としてとらえ、国内外の内陸舟運の活用例を示すとともに日本橋川で行われた社会実験から得られた東京における河川のイメージについて考察した。特に本論文では、都市再生における観光舟運による効果について着目し考察した。

2. 内陸舟運の特徴

内陸舟運は、河川や運河の整備が始まった江戸時代に顕著に発展し、江戸等の大都市を軸に、地方と都市を結ぶ重要な手段であった。関東地方では、昭和初期までに内陸都市が鉄道や道路を中心に発展していったことから、内陸舟運は次第に衰退していった。現在の我が国の内陸舟運は、沿岸域や河川の河口部から遡上可能な範囲までの河川で展開されている。その機能は物流や観光、防災であり、都市再生の手段としても着目されている。

3. 事例による舟運の検討

内陸舟運はその地域の文化や、気候、地形、水理特性影響をうける。そこで、国内外の事例を調査し、その資料をもとに内陸舟運の都市に与える効果を考察した。

1) 東京 隅田川(写真-1)

昭和40年代、都市排水等により水質汚濁が顕著であった。中でも観光舟運が行われており、現在では工場排水規制や下水道の整備により水環境も改善され、テラス等の親水性の高い整備も進められており、川から都市を見ることができる代表的な河川となっている。また、浅草とお台場等の観光地を結び、集客性の高い東京を代表する観光舟運が行われている。

2) 大阪 道頓堀川(写真-2)

水質改善と併せて、上下流に水門を設置して水位を一定に保つことにより、水質浄化するとともに観光舟運を行い、誘客性を高め、リバーウォークを設け、水辺空間の賑わいを創出している。

3) イギリス テムズ川(写真-3)

テムズ川沿いの観光地をつなぐ遊覧船が運航されている。川沿いには歴史的な建築物のある町並みや再開発が行われたドッグランドなどがある、観光舟運により、水面からの賑わいがある。

4) イギリス ロンドン市内外の運河(写真-4)

モータリゼーションの発展とともに埋立てられた運河の復元等により、水路としての運河の有効活用が行われ、



写真-1 東京 隅田川



写真-2 大阪 道頓堀川



写真-3 テムズ川の舟運と沿川再生



写真-4 イギリス運河の様子

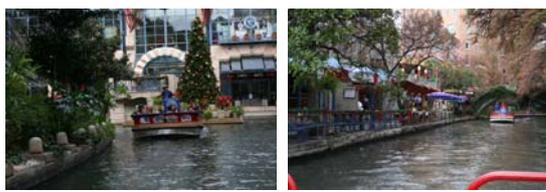


写真-5 サンアントニオ川



写真-6 タイの水上マーケットの様子

ている。ナローボートによる観光舟運が各所で行われ水辺を活かしたレクリエーションが行われている。

5) アメリカ サンアントニオ川(写真-5)

アメリカのサンアントニオでは、都市の中を流れるサンアントニオ川の治水対策として上流にダムを設置、蛇行区間の捷水路の整備、さらに地下放水路等の設置を行った。

キーワード：観光、舟運、都市河川、都市再生

住所：〒274-0063 千葉県船橋市習志野台7-24-1 737号室

連絡先：日本大学理工学部社会交通工学科

TEL・FAX 047-469-5228

約1kmの旧河道の蛇行区間にはリバーウォークを設け、カフェやレストラン等が立地し、観光舟運も行われ、年間約1千万人の観光客以上に利用されている。

6) タイの水上市場(写真-6)

かつては住民の生活の場であり、各地からの物資等の市場として都市を支えてきたが、現在では水上レストランや観光市場として利用されており、内陸舟運が行われている。

7) 舟運の効果について

国内外の事例より観光舟運の都市や人に及ぼす効果として以下のことが挙げられる。

- ・舟運自体の魅力
- ・人の感性の高揚
- ・観光地等を結節する移動手段
- ・親水性を含めた水辺の価値の向上
- ・沿川都市の魅力向上・活性化

4. 社会実験

平成18年11月3日にNPO法人都市環境研究会が主催し、船を用いた水辺の開放の社会実験を日本橋川と神田川において実施し、舟運や都市河川のイメージ等のアンケート調査を行った。その結果は以下のとおりである。

1) 調査結果

都市河川のイメージは図-1、2に示すように汚い、遊べない、水辺が遠い等の割合が多いことからあまり良いイメージがないことがわかる。

図-3に示すように、社会実験の感想はほとんどが好意的なものが多く、否定的なものはなかった。

図-4に示すように、東京の運河や河川に船を利用した観光が必要であるかどうかという質問に対して、舟運は必要であるという意見が大半であった。

図-5に示すように、運河や川を利用した観光開発に必要なものとして、川沿いのレストランやカフェや遊歩道などの沿川空間整備の要望が多かった。

2) 都市河川の課題と舟運の可能性について

都市排水による臭い、上空を高速道路で占める非開放的空間、水辺へのアクセスが不可能な直立護岸、さらに建物が水際までせまっていることによって、閉鎖的な空間で構成されていることが、都市河川のイメージを悪くしており、その改善が必要である。

一方、船への体験乗船は、日常生活にない経験であるとともに、水面から都市を再発見する機会となることから、乗船者に満足を与えていたものと考えられる。このことは舟運自体の魅力の高さを現しているものであり、舟運は水辺と人を近づける手段となりえるものと考えられる。

5. 結語

観光舟運を発展させていくためには、その効果を最大限生かすことが重要であり、水面からの魅力を高める経路の選定や、多様で統一感のある沿川の水辺空間の整備が必要である。

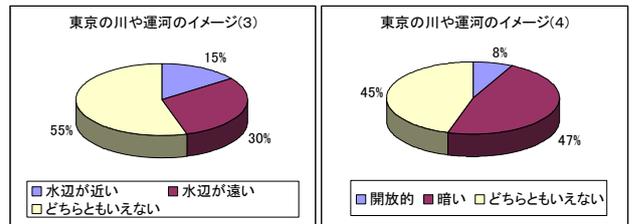


図-1 東京の河川や運河のイメージについて(左:水辺の身近さ 右:開放感について)

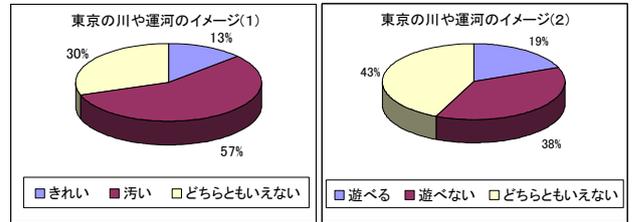


図-2 東京の河川や運河のイメージについて(左:水質 右:遊ぶことの可、不可)

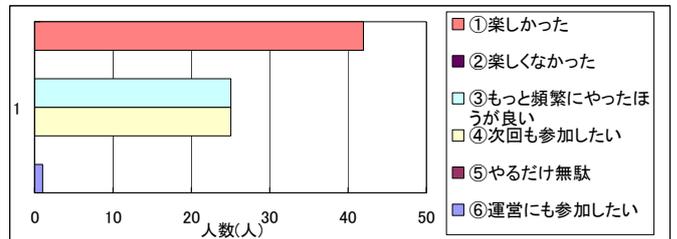


図-3 社会実験後の感想について

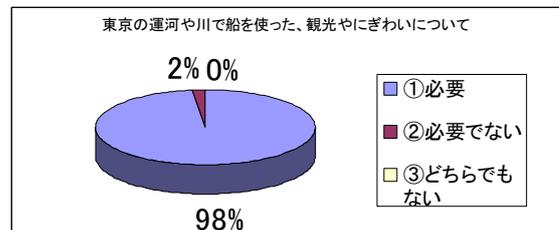


図-4 東京の運河や川で船を使った、観光やにぎわいについて

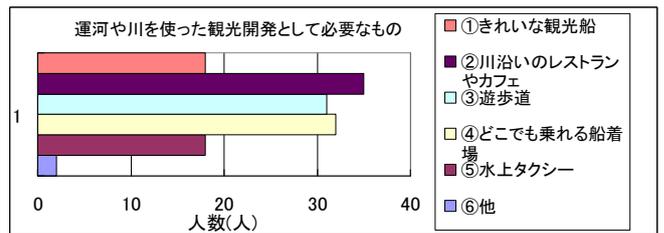


図-5 運河や川を使った観光開発として必要なもの

観光舟運は、河岸の活気と喧噪による賑わい等を創出し、水辺空間の価値を高めるとともに、水辺を生かした都市再生の一つの手段として非常に有効だと裏づけされた。

参考文献

- ・ 財団法人リバーフロント整備センター：内陸水運への招待、2001
- ・ 吉川勝秀：河川流域工学、技報堂出版、2005
- ・ 日建設計：水辺再生に向けて10の提言